

小中学生およびその保護者のソーシャルキャピタル

— 小中学校比較を中心に —

渋谷真樹¹、板橋孝幸¹、橋崎頼子¹、市来百合子²、瓜生淑子³、
立石麻衣子²、藤田美佳²、大久保千恵²、井深雄二¹、生田周二²

*1 奈良教育大学 学校教育講座 (教育学)

*2 奈良教育大学 次世代教員養成センター

*3 奈良教育大学 学校教育講座 (幼年教育学)

A Study of the Social Capital of Elementary/Junior-high School Students and Their Parents: The Comparison of Elementary School and Junior-high School

Maki SHIBUYA¹, Takayuki ITABASHI¹, Yoriko HASHIZAKI¹, Yuriko ICHIKI², Yoshiko URIU³,
Maiko TATEISHI², Mika FUJITA², Chie OKUBO², Yuji IBUKA¹, Shuji IKUTA²

*1 Department of School Education (Educational Studies), Nara University of Education

*2 Teacher Education Center for Future Generation, Nara University of Education

*3 Department of School Education (Studies of Early Childhood Education), Nara University of Education

要旨:本研究は、小中学生およびその保護者のソーシャルキャピタル (SC) の実態を明らかにすることを目的とする。そのために、同系列にある小中学校1校ずつを対象に、小学5、6年生と中学校の全学年および保護者に、SCの下位概念である認知的SCと構造的SCについてアンケート調査を行い、その実態を明らかにした上で、小中学校での比較を行った。その結果、小学生が中学生よりも、世の中の人々、近所の人々、教師への信頼が高いことがわかった。一方、悩んだり困ったりしているときの友だちとの助け合いについては、中学生の方が肯定的に回答していた。ボランティアや習い事は小学生の方が多く行っているが、塾は中学生の方が多く通っていた。小学生の保護者と中学生の保護者を比較すると、認知的SCについては有意差はなかったが、授業参観への参加や教師への相談については、前者の方がよく行っていると回答した。今後よりSCを豊かにしていくために、こうした小中学校の差異を意識した対応が望まれる。

キーワード: ソーシャルキャピタル social capital

小中学校比較 comparison of elementary school and junior-high school

認知的ソーシャルキャピタル cognitive social capital

構造的ソーシャルキャピタル structural social capita

1. 問題の背景と課題の設定

ソーシャルキャピタル¹とは、人々間の協調的な行動を促す「信頼」、「互酬性の規範」、「ネットワーク(絆)」を指す(稲葉、2011、p.i)。SCという概念はそもそも、教育と近い領域で生まれ、発展してきた(稲葉、2011)。その先駆的研究としては、コールマン(2006)やパットナム(2006)を挙げることができる。教育水準はSCが「招来する結果であると同時に、その醸成要因でもある」(稲葉、2008、p.20)とされている。

近年、日本においては、階層間格差を是正する可能性をはらむものとしてSCが注目されている。子どもの学業達成には親の経済資本や文化資本が大きく影響

することは繰り返し指摘されてきたが(荻谷・志水、2004など)、そのことは、ややもすれば学校や教育の無力感を招きがちであった。SCも経済資本や文化資本の従属変数になりつつあるとの指摘もある(平塚、2006)が、SCは、経済資本や文化資本とは比較的独立しており、かつ、不利な階層にある子どもほど学業達成に及ぼす効果が強まる、というデータも示されている(志水・中村・知念、2012;志水・前馬・芝野・長谷川、2014)。もしも、SCが後者であるならば、『『学校』によって階層間の学力格差を克服する手立てを探ることができる』と期待される(志水・前馬・芝野・長谷川、2014、p.1)。

では、子どもたちやその保護者は、どのようなSC

をもっているのだろうか。そもそも現代日本社会の文脈においては、子どもや保護者のSCとはどのようなものなのだろうか。朝倉（2011）は、中学2年生を対象に、中学生の主観に基づいた身近な地域環境の質、個人レベルでの認知的SC（互惠性、社会的信頼、身近な社会規範の遵守）および構造的SC（社会的活動への参加）の3つを測定している。日本の子どもたちの実態に即した調査項目の設定や、多面的なSCの把握という点で、示唆が大きい。

岡正・田口（2012）は、子ども自身が認識する子どもと地域との関係の実態を、小中学生を比較しつつ明らかにしている。そこからは、つきあい・交流、信頼、社会参加の各方面で、小学生の方が中学生より豊かなSCをもっているという結果が出ている。この調査は、内閣府が測定したSCの総合指数が全国のほぼ中央値に相当するひとつの県を対象にしているが、このような結果が他の地域でも当てはまるのか、追調査が求められる。

一方、保護者については、保護者の学校信頼感における保護者ネットワークの効果（露口、2012）や学校行事等の充足感との関係（露口、2008）が明らかにされている。校区の経済的特性や家族構成特性は、学校信頼の直接的な原因ではない（露口、2012）という知見がある一方で、保護者の学校支援活動には職業階層やSCが関係しているという知見（城内・藤田、2011；城内、2013）もあり、いまだ議論が続いている。

そこで、本研究では、このような先行研究を踏まえながら、ある小中学校における子どもや保護者のもつSCの実態を明らかにしていくことを目的とする。そのために、小学生、中学生、および、その保護者を対象に、認知的側面と構造的側面に分けて、どのようなSCをどの程度もっているのかをアンケート調査から明らかにする。その上で、小学生と中学生とのSCのちがいや、小学生の保護者と中学生の保護者のSCのちがいについて明らかにしていく。

2. 調査の概要

2.1. 調査対象

本調査は、同じ大学の附属校である小学校と中学校1校ずつを対象にする。これらの学校は、比較的広域から児童生徒を集めている。小学校では抽選、中学校では学力検査で入学者を決定している。ただし、一定数の内部進学者がいる。

有効回答数は、小学生で192人、中学生で407人、保護者で375人である。そのうち、親子のペアで回答を得たものは、小学校で162組、中学校で199組の計361組である。

2.2. 調査方法

調査は、2013年10月に、担任がクラスで配布し、質問項目を読み上げる形で、無記名による質問紙法を行った。保護者については、児童生徒に持ち帰ってもらって記入を依頼し、後日、担任を通して回収した。児童生徒と保護者とは、同じ番号をふって親子を同定させた。

日本の小中学生のSCを複層的に捉えるために、朝倉（2011）の質問項目を参照して、個人レベルの認知的SCと構造的SCを測定した²。認知的SCとしては、朝倉（2011）が調査した13項目すべてを質問した上で、本稿では、朝倉（2011）およびその確認的因子分析である市来他（2015）によって中学生データから確認された「社会規範の遵守」、「社会的信頼感」、「互惠性」の3因子を構成する8項目に絞って分析する。その8項目は、以下のとおりである。保護者については、（ ）内に示したように、若干のワーディングの変更をしている。

「世の中のたいていの人は信頼できる」
 「近所に住んでいるたいていの人は、信頼できる」
 「（子どもの学校の）先生を信頼している」
 「わたしは、友だち（友人・知人）が悩んだり、困ったりしているときに、よく助けている」
 「友だちは、わたしが悩んだり、困ったりしているときに、よく助けてくれる」
 「友だち（友人・知人）との約束をよく守っている」
 「家のルールや決められたこと（地域で決められたルール）をよく守っている」
 「クラスや学校で決められた約束ごと（学校との間でのルール）をよく守っている」

小中学生の構造的SCについても、基本的に朝倉（2011）を踏襲し、以下8項目（小学生には7項目）について、過去1年間の活動経験の有無を尋ねた。小学生に対しては、生徒会を児童会とするなど、下記の（ ）内のワーディングの変更を行った。

「生徒（児童）会の委員やクラスの委員」
 「体育祭（運動会）、学園祭（学芸会）、林間学校など学校行事の運営や手伝い」
 「祭り、バザーなど地域で行われる行事や活動」
 「ボーイスカウトやガールスカウト、ボランティアなどの活動」
 「学校以外でのスポーツのクラブやサークル活動」
 「趣味や習いごと（スポーツ系、文化系）、けいこ事などの活動」
 「塾に通う」
 「部活動」（所属の有無。中学生のみ）

また、保護者の認知的SCについては、子どもの学校に関わる活動として、以下の4項目にどの程度あてはまるかを4件法で尋ねた。

- 「PTA 役員は積極的に引き受ける」
- 「学校行事にはよく参加する」
- 「授業参観にはよく参加する」
- 「困ったことがあればよく学校の先生に相談する」

保護者の構造的SCについては、他に、内閣府（2003）の調査項目にある「地縁的な活動」など4項目についても尋ねているが、本稿では、学校に関わる活動に限定して報告する。

3. 小中学生のSC

3.1. 小学生のSC

3.1.1. 小学生の認知的SC

小学生の認知的SCの項目ごとの回答分布は、図1の通りである。

「世の中の人はいいてい信頼できる」は7割程度、「近所に住んでいるたいいていの人はい、信頼できる」は8割弱、「先生を信頼している」は8割から9割が、「よくあてはまる」「あてはまる」と答えている。性別と「先生を信頼している」のクロス集計から、先生を信頼している割合は、女子児童の方が高いことが読み取れる（有意確率0.001、カイ二乗値16.773、自由度3）。

「わたしは、友だちが悩んだり、困ったりしているときに、よく助けている」と「友だちは、自分が悩んでいたとき、よく助けてくれる」は8割前後が「よくあてはまる」「あてはまる」と答えている。5年生より6年生の方が、高い数値で友だちへ

の支援を行い、友だちからの支援についても感じ取っている。

「友だちとの約束をよく守っている」は9割以上、「家のルールや決められたことをよく守っている」は8割前後、「クラスや学校で決められた約束ごとをよく守っている」は9割前後が、「よくあてはまる」「あてはまる」と答えている。多くの児童が、肯定的な回答をしている。

3.1.2. 小学生の構造的SC

小学生の構造的SCについては、図2のような結果を得た。

「児童会の委員やクラスの委員」では7割前後、「運動会、学芸会、林間学校など学校行事の運営や手伝い」は5年生で35%、6年生で84%、「祭り、バザーなど地域で行われる行事や活動」は5年生で32%、6年生で60%、「ボーイスカウトやガールスカウト、ボランティアなどの活動」は2割台、「学校以外でのスポーツのクラブやサークル活動」は5年生で46%、6年生で59%、「趣味や習いごと（スポーツ系、文化系）、けいこ事などの活動」は5年生で79%、6年生で93%、「塾に通う」は5年生で47%、6年生で66%、「その他の活動」は5年生で31%、6年生で59%が1年間のうちに活動したと答えている。全体的に、「児童会の委員やクラスの委員」の項目以外、5年生より6年生の方が高い活動割合であった。性差が大きかったのは「学校以外でのスポーツのクラブやサークル活動」で、5年生男子は65%、女子は27%、6年生男子は69%、女子は48%だった。男子の経験率が高く、学年が上がるとその差が小さくなる傾向が見られた。

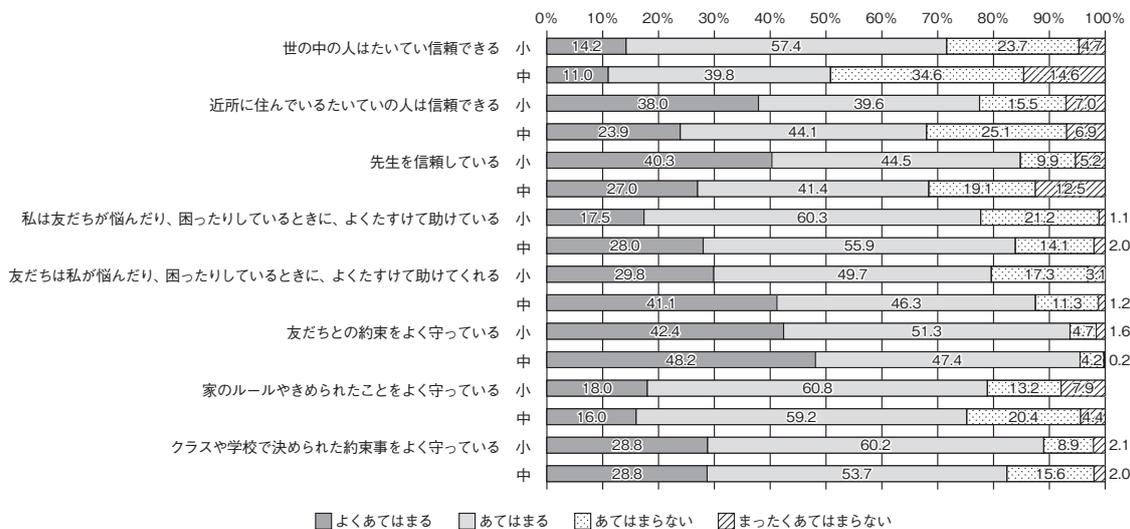


図1 児童・生徒の認知的SC項目の回答分布（小中学生別）

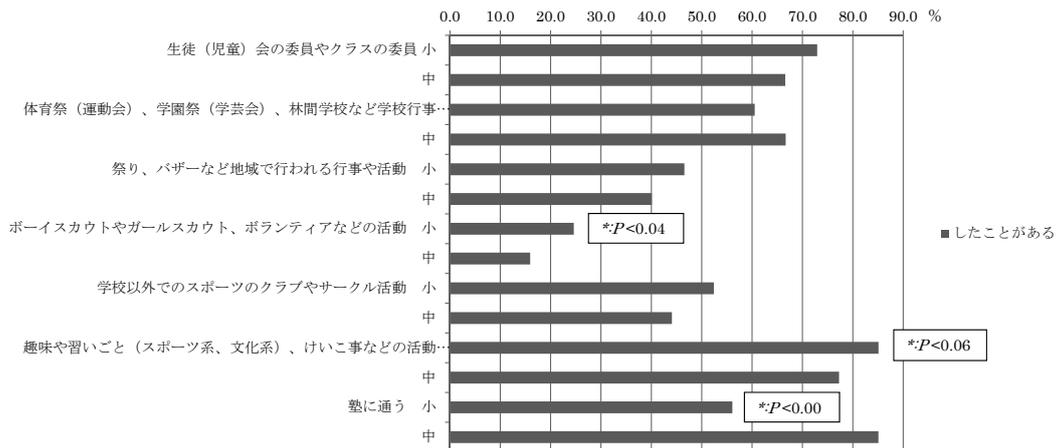


図2 児童・生徒の構造的SC項目の回答分布（小中学生別）

3.2. 中学生のソーシャルキャピタル

3.2.1. 中学生の認知的SC

中学生の認知的SCについては、図1のような結果を得た。「世の中の人をたいてい信頼できる」は5割程度、「近所に住んでいるたいていの人を、信頼できる」は6割から7割、「先生を信頼している」は6割から8割が「よくあてはまる」「あてはまる」と答えている。割合の幅は学年による違いであり、「よくあてはまる」「あてはまる」と答えた生徒の割合は学年進行とともに減少する傾向がある。

「わたしは、友達が悩んでいたたり困っているときに、よく助けている」は8割、「友達は、自分が悩んでいたたり困っているときに、よく助けている」は9割弱が、「よくあてはまる」「あてはまる」と答えている。「わたしは、友達が悩んだり、困ったりしているときに、よく助けている」は2年生と3年生で性差が見られる。2年生は女子が92%に対して男子は78%、3年生は女子が91%に対して男子は72%だった。全体として、男子に比べて、女子は友だちへの支援、友だちからの支援が顕著といえる。（「わたしは、友達が悩んだり、困ったりしているときに、よく助けている」の性差の有意確率は0.003、カイ二乗値13.803、自由度3。「友だちは、自分が悩んだり、困ったりしているときに、よく助けてくれる」の性差の有意確率は0.016、カイ二乗値10.339、自由度3）。

「友だちとの約束をよく守っている」は95%以上、「家のルールや決められたことをよく守っている」は7割から8割、「クラスや学校で決められた約束ごとをよく守っている」は8割から9割弱が「よくあてはまる」「あてはまる」と答えている。

3.2.2. 中学生の構造的SC

中学生の地域や学校などにおける活動への参加については、図2のとおりである。「生徒の委員やクラス

の委員」は6割弱から7割、「体育祭、学園祭、林間学校など学校行事の運営や手伝い」は1年生で8割弱、2・3年生で6割前後、「祭り、バザーなど地域で行われる行事や活動」は4割弱から5割弱、「ボーイスカウトやガールスカウト、ボランティアなどの活動」は1割台、「学校以外でのスポーツのクラブやサークル活動」は4割から5割、「趣味や習いごと（スポーツ系、文化系）、けいこ事などの活動」は7割から8割強、「塾に通う」は8割から9割、「その他の活動」は1割台が1年間のうちに活動したと答えている。

さらに細かく検討すると、次のような特徴があった。「生徒会の委員やクラスの委員」は学年進行で経験率が高くなり、女子の経験率が男子より高い傾向が見られた（有意確率0.021、カイ二乗値5.357、自由度1）。なお、1年女子68%、男子51%、2年女子71%、男子60%、3年女子75%、男子69%であった。「体育祭、学園祭、林間学校など学校行事の運営や手伝い」は、1年生で8割弱の関与率があるが、2・3年生になると6割前後に下がる。「祭り、バザーなど地域で行われる行事や活動」「ボーイスカウトやガールスカウト、ボランティアなどの活動」「趣味や習いごと（スポーツ系、文化系）、けいこ事などの活動」は、学年進行で経験率が低くなっている。「学校以外でのスポーツのクラブやサークル活動」は性差が大きく、男子の経験率が高い（有意確率0.034、カイ二乗値4.504、自由度1）。しかし、1年男子が61%、女子が40%、2年男子は49%、女子が38%、3年男子が41%、女子が38%となっており、学年が上がると差が小さくなる傾向が見られた。

以上のことより、構造的SCにみられる性差の特徴として、女子は学校での構造的SCを男子よりも豊富に有している。また、学校以外の場でのスポーツを通じた構造的SCについては、男子の方が女子よりも豊富に有していると考えられる。

表1 小中学生の認知的SCの項目の評定平均値

	小学生	中学生	t	
	n =	n =		
	M (SD)	M (SD)		
世の中信頼	2.781 (.7820)	2.471 (.8736)	- 4.371	***
近所信頼	3.005 (1.0156)	2.822 (.9037)	- 2.228	**
先生信頼	3.182 (.8519)	2.815 (.9839)	- 4.692	***
私友だちを助ける	2.896 (.7447)	3.100 (.7009)	3.265	***
友だち私を助ける	3.047 (.8011)	3.241 (.7741)	2.843	***
家の決まりごとを守る	2.844 (.8601)	2.846 (.7617)	0.037	
学校約束ごとを守る	3.141 (.6986)	3.093 (.7174)	- 0.771	
友だち約束守る	3.328 (.6877)	3.427 (.6102)	1.775	

**p < .00, *p < .01, *p < .05.

3.3. 小中学校のソーシャルキャピタルの比較

認知的SCをめぐる8項目の平均を小学生と中学生とで比較したところ、SCの内容によって多様な差異がみられた(表1)。

まず、「世の中のたいいていの人は信頼できる」「近所に住んでいるたいいていの人は、信頼できる」「先生を信頼している」といった人々に対する信頼に関する項目では、いずれも小学生の方が有意に高い数値を示した。小学生の方が中学生より信頼性が高いという結果は、岡正・田口(2012)を支持している。

一方、「わたしは、友だちが悩んだり、困ったりしているときに、よく助けている」「友だちは、わたしが悩んだり、困ったりしているときに、よく助けてくれる」については、中学生の方が優位に高い数値を示した。すなわち、小学生よりも中学生の方が、友だちとの助け合いの関係を認知していることがわかる。

「家のルールや決められたことをよく守っている」「クラスや学校で決められた約束ごとをよく守っている」「友だちとの約束をよく守っている」の3項目については、いずれも小中間に有意差はなかった。ここから、規範の遵守については、小学生と中学生で差異はないことがわかる。

構造的SCをめぐるのは、小学校で5年と6年で実施率の大きく異なる項目があるが、ここでは小中学校間の差を見るために、それぞれの平均を取って比較したところ、3項目で有意差がみられた(図2)。「ボーイスカウトやガールスカウト、ボランティアなどの活動」や「趣味や習いごと(スポーツ系、文化系)、けいこ事などの活動」は小学生の方が積極的に行っている一方、塾は中学生の方が多く通っている。ここから、学校以外にも地域や任意団体、趣味の会などで幅広いSCをもっている小学生に対して、中学生は学校外でも勉強中心の生活になっていることが推測される。

4. 保護者のソーシャルキャピタル

4.1. 保護者の認知的SC

保護者の認知的SCについては、図3のような結果を得た。なお、小中学校間での有意差はなかったため、以下は、小中学校を合算して記す。

ここからは、保護者にとって、子どもの学校の先生(85%) > 近所の人(75%) > 世の中一般(60%)の順に信頼度が高い(カッコ内は、「よくあてはまる」と「あてはまる」を合計した割合、以下同様)ことがわかる。

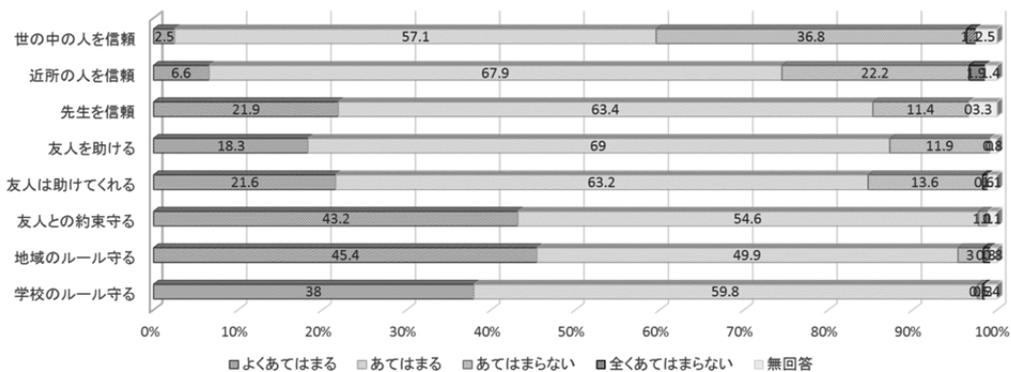


図3 保護者の認知的SCの項目の回答分布

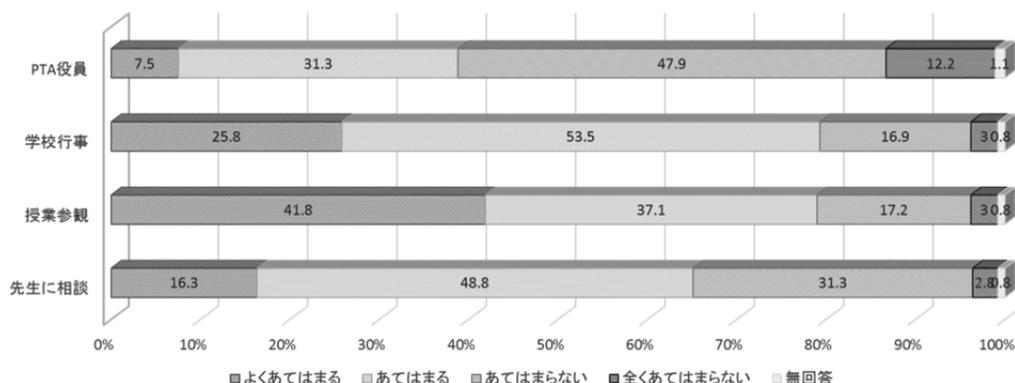


図4 保護者の構造的SCの項目の回答分布

知己の人の方がそうでない人よりも信頼しやすいという結果であるが、教師が近所の人以上に保護者からの信頼を勝ち得ていることがわかる。とはいえ、なお1割強の保護者は、教師が信頼できずにいる。

友人・知人との助け合いといった関係については、自分から助ける方で87%、助けられる方で85%が肯定的に回答している。いずれの場合も、1割強の保護者は、否定的に回答している。

学校との間でのルールや友人・知人との約束の遵守については、肯定的に回答した保護者がともに98%と高い数値を示している。それよりは数値は下がるものの、地域で決められたルールについても、遵守する保護者が95%を越えている。

4.2. 保護者の構造的SC

保護者の構造的SCとしては、本稿では子どもの学校に関わる活動に着目する。結果は、図4に示す。

各活動への参加について「よくあてはまる」「あてはまる」と回答した保護者の割合は、学校行事(79%)、授業参観(79%)、困ったことの学校の先生への相談(65%)、PTA役員の積極的な引き受け(39%)の順に高い。ここからは、学校行事や授業参観への参加といった学校主体の行事については8割近くの保護者が関与していることがわかる。一方で、PTA役員を引き受けたり教師に相談したりといった保護者側からのより主体的な関与については、消極的な保護者がより多

いことがわかる。城内・藤田(2011)は、新興住宅地の公立小学校を対象とした調査で、保護者は学校行事には高い割合で参加するものの、わが子に直接関係しない、PTA役員などの学校支援活動の関与率は低いことを示しているが、本調査でも、それを支持する結果となった。

4.3. 小学生の保護者と中学生の保護者との比較

小学生の保護者と中学生の保護者を比較したところ、認知的SCについては有意差はなかった。すなわち、子どもが小学生か中学生かによっては、保護者の信頼感や助け合い、規範の遵守はかわらないことがわかった。

一方、構造的SCについては、子どもの成長段階によって、学校と家庭との関係が異なっていることがわかる。具体的には、「授業参観にはよく参加する」と「困ったことがあればよく学校の先生に相談する」で、いずれも小学生の保護者の方が中学生の保護者より積極的に行っていた(表2)。PTA役員の引き受けや学校行事への参加では、有意差はなかった。

一部の人が担うPTA役員を引き受けたり、年に数回しかない学校行事に参加したりすることに比べれば、授業参観への参加や困ったことの教師への相談は、より自分の子どもに直結した日常的事務と言えるだろう。そうした日常的な保護者の学校との接触は、子どもが中学生になると減っていくことを、このデータは示している。ここから、中学生の保護者は小学生の

表2 保護者の構造的SCの項目の評点平均値(小学生の保護者と中学生の保護者との比較)

	小学生の保護者	中学生の保護者	t	
	n = 162	n = 199		
	M (SD)	M (SD)		
PTA役員を引き受ける	2.333 (.7960)	2.307 (.8478)	0.307	
学校行事に参加する	3.056 (.7158)	2.960 (.8459)	1.165	
授業参観に参加する	3.395 (.7670)	2.970 (.9096)	4.735	***
困ったことを先生に相談する	2.870 (.7320)	2.688 (.8124)	2.235	**

*** $p < .00$ ** $p < .01$, * $p < .05$.

保護者に比べて、教師との関係が部分的であることが推測される。

5. 考察

本研究では、同系列にある小中学校1校ずつで行った小学5、6年生と中学校全学年および保護者に対して行ったアンケート調査から、SCの実態を明らかにした。その結果、小学生では、女子が男子より先生への信頼が高いこと、5年生より6年生が友だちとの助け合いを感じていること、多くの児童が規範を遵守していることがわかった。構造的SCは5年生より6年生が豊かで、スポーツクラブやサークル活動では女子より男子が経験率が高かった。中学生は、学年進行とともに信頼感は減少すること、男子より女子が友だちとの助け合いを感じていること、多くの生徒が規範を遵守していることがわかった。学校での構造的SCは女子の方が、学校以外での構造的SCは男子の方が多く有していた。

また、小学生が中学生よりも、世の中の人々、近所の人々、教師への信頼が高いことがわかった。一方、悩んだり困ったりしているときの友だちとの助け合いについては、中学生の方が肯定的に回答していた。ここから、成長段階によって異なるSCのありようがうかがわれる。身近な人から世間一般まで、ひろく信頼感をもって接することができる小学生に対して、中学生は、より閉じられた空間の中で、繊細な人間関係を体験していることが予想される。親密な友人関係は、相互に扶助したり、切磋琢磨したりといった健全な成長を促しうる。同時に、近年社会問題化している、「空気を読む」、「キャラを立てる」といった表現によってあらわされる友人間での過敏なまでの神経の張りようとも隣り合わせである。同年齢・同性間の親密な関係を大切にするとともに、教室や学校の外の、立場や経験、考えの異なる人々との交流を増やす機会が、とりわけ中学生に求められているだろう。

しかしながら、本研究から明らかになった小中学生の構造的SCのありようは、中学生が学外での人間関係を広げることが容易ではないことを示している。すなわち、小学生は中学生以上に、ボーイスカウトやガールスカウト、ボランティアといった地域の活動に参加したり、幅広く趣味の活動や習い事をしている一方で、中学生は小学生以上に、塾にエネルギーを割いている。受験戦争はヤマ場を過ぎ、むしろ、進学の意味も機会も二極化がすすんでいるといわれる現在であるが、少なくとも今回対象にした中学校では、系列の小中学校以上に、受験への対応が迫られていることがうかがわれる。

とはいえ、塾を、勉強のみを詰め込む無機質な空間と考えるのは早計であろう。中学生は、勉強や受験、

競争を意識しつつも、学校とは異なる塾という空間で、別の人間関係を育んでいるかもしれない。今後、詳細な質的調査が求められる。

保護者については、子どもが小学生であっても中学生であっても、認知的SCについてはちがいがなかった。しかし、学校との関係を示す構造的SCについては有意差があった。中学生の保護者は小学生の保護者に比べて、授業参観に参加したり教師に相談したりすることが減っている。このことは、中学生はすでに学校生活が安定し、保護者は安心して教師と本人とに任せているため、とも考えられるが、中学校が小学校に比べて、家庭が近付きにくいものになっている可能性もある。学校行事への参加やPTA役員の引き受けに関しては、小中学生の保護者間で差異はないので、学校側は、学校と家庭が接点をもつ、学校行事やPTA役員会議といった貴重な機会を生かしつつ、家庭の状況を確認していく必要があるだろう。今後よりSCを豊かにしていくために、こうした小中学校の差異を意識した対応が望まれる。

本稿では、小学生、中学生、保護者のSCを、認知的側面と構造的側面から検討し、主に小中学校間の比較を行った。今後は、子どものSCと保護者のSCとの関係を探っていく必要がある。もしも両者が強く相関しているのであれば、SCも経済資本や文化資本と同様に、親世代から子世代へと「遺産相続」(ブリュデュー・パスロン、1997)されて、階層間格差の再生産を助長することになるかもしれない。その場合には、子どものみならず、家庭への支援も必要になるであろう。一方、もしも両者の相関が弱ければ、学校や地域の教育機関等で、子どものSCを育む活動をしていくことの有用性に、強い根拠を得ることができる。

また、今回の分析では、保護者のSCを学校との関係に限って分析したが、本調査では、ボランティアや趣味の活動、居住地域の環境などについても調査している。今後は、こうしたデータも使用しながら、子どもを育てる家庭のSCについての理解を深めていきたい。

本研究は、平成25年度奈良教育大学学長裁量経費(生田周二代表)「奈良県の小中学校のストレス反応の規定要因に関する調査研究」によって行われた調査の結果である。なお、本稿の執筆に関しては、3.1.を板橋、3.2.を橋崎、それ以外を渋谷が担当した。分析については、市来と瓜生の助言を得た。

引用文献

- 朝倉隆司「中学生における近隣の地域環境の質、個人レベルのsocial capitalと抑うつ症状との関連」『日本公衆衛生雑誌』第58巻第9号、2011、754-767
- 市来百合子・瓜生淑子・立石麻衣子・渋谷真樹・大久保千恵・藤田美佳・板橋孝幸・橋崎頼子・井深雄二・生田周二「中学生における認知的・創造的ソーシャルキャピタルと精神的適応の関係」『奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要』第1号、2015
- 稲葉陽二「ソーシャル・キャピタルの多面性と可能性」稲葉陽二編著『ソーシャル・キャピタルの潜在力』日本評論社、2008、11-22
- 稲葉陽二『ソーシャル・キャピタル入門—孤立から絆へ—』中央新書、2011
- 岡正寛子・田口豊郁「子どもの発達に焦点をあてた地域の役割—子どもの認識するソーシャルキャピタルの測定から—」『川崎医療福祉学会誌』Vol.21、No.2、2012、184-194
- コールマン、ジェームズ・S 金光淳訳「人的資本の形成における社会関係資本」野沢慎司編・監訳『リーディングス ネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本—』勁草書房、2006、205-234
- 荻谷剛彦・志水宏吉『学力の社会学：調査が示す学力の変化と学習の課題』岩波書店、2004
- 志水宏吉・中村瑛仁・知念渉「学力と社会関係資本—つながり格差—について」志水宏吉・高田一宏編『学力政策の比較社会学—全国学力テストは都道府県に何をもたらしたのか—』明石書店、2012、52-89
- 志水宏吉・前馬優策・芝野淳一・長谷川梓「学力の階層間格差とその克服可能性—2013年大阪学力調査から—」日本教育社会学会第66回大会配布資料、2014
- 城内君枝「社会関係資本が保護者の学校参加に及ぼす影響—保護者のネットワークに着目して—」『教育実践学論集』第14号、2013、59-66
- 城内君枝・藤田武志「階層と社会関係資本が保護者の学校参加に及ぼす影—S小学校の事例調査を通して—」『学校教育研究』26号、2011、87-98
- 露口健司「保護者による学校信頼の決定要因—都市近郊部の公立中学校区を事例として—」『愛媛大学教育学部紀要』vol.55、2008、19-26
- 露口健司「保護者ネットワークと学校信頼」『愛媛大学教育学部紀要』vol.59、2012、59-70
- パットナム、ロバート・D 柴内康文訳『孤独なボーリング—米国コミュニティの崩壊と再生—』柏書房、2006
- 平塚真樹「移行システム分解過程における能力感の転換と社会関係資本—『質の高い教育』の平等な保障をどう構想するか—」『教育学研究』第73巻第4号、2006、69-80

ブルデュー・パスロン 石井洋二郎監訳『遺産相続者たち—学生と文化—』藤原書店、1997

註

- ¹ social capital。ソーシャル・キャピタル、社会資本、社会関係資本と訳される時もある。以下、引用を除いて、SCと略す。
- ² 質問紙作成においては、朝倉氏より質問項目の教示および使用許可を得た。記して感謝したい。